された。ビタミン B1 の経静脈的大量投与により上記症状は速やかに改善した。術後の化学療法時の悪心、嘔吐などの消化器症状に対して高カロリー輸液を併用する際にはビタミン、微量元素などの栄養素補充に対する注意が必要である。

39) 5-FU 投与が原因と考えられた白質脳症の1例

山口 修・千田 匡 (立川総合病院外科)
植木 秀任 (同 脳外科)
福田 光典・小林 勉 (新潟大学第一外科)
山洞 典正 (新潟大学脳研究所)
小柳 清光 (神経病理)

症例は56歳女性。1991年2月20日左乳癌にて非定型的乳房切断術 (Auchincloss 法) を施行。92年12月17日胸部レ線にて多発性肺転移みられたため93年1月12日より3月7日にかけて CAF 療法2クール (総投与量 5-FU 2,000 mg ADM 100 mg EDX 2,800 mg) 施行。3月16日突然の意識レベルの低下、全身痙攣発作発症。脳 CT, MRI にて大脳白質後頭葉に変性を疑う広範な病変を認めた。生検し得た神経病理学的診断では白質脳症であった。髄液検査では異常所見は認められなかった。その後保存的療法にて症状軽快37日後の脳 CT でも陰影の消失が認められた。原因として 5-FU 投与の影響が強く疑われた。

40) 薬剤による間質性肺炎を呈した2例

丸田 智章・三科 武
石原 良・阿部 和男
藤島 丈・加藤 知邦 (鶴岡市立荘内病院)
大谷 哲士・斉藤 博 (外科)

カルバペネム系薬剤によると思われる間質性肺炎を呈した2例を報告いたします。

【症例1】81歳、女性。盲腸癌と診断され、右半結腸切除術を施行された。9病日より微熱、呼吸困難出現し、肺炎を疑われ、チエナムを投与開始された。投与開始後4日目より間質性肺炎像を呈し、徐々に増強、人工呼吸管理、ステロイド剤投与が施行されたが、呼吸状態は改善されず、死亡した。

【症例2】64歳、男性。直腸癌の診断で、低位前方切除術を施行された。9病日に腹壁離開し、手術施行され、同日よりチエナムを投与開始された。投与開始後4日目より間質性肺炎像が出現し、徐々に増強、呼吸困難強く、

人工呼吸管理を行い、ステロイド剤投与を行った。肺炎像は改善され、原疾患も経過良好にて、退院した。薬剤感受性試験 (DLST) を投与した数剤に行ったところ、チエナムのみに反応が認められ、チエナムによる間質性肺炎が考えられた。

41) S状結腸癌術後の腎後性急性腎不全に対し手術、制ガン剤で積極的に加療した1例

宗岡 克樹・佐藤 攻 (信楽園病院外科)
清水 武昭

腸閉塞で発症したS状結腸癌の1症例に Hartmann 手術を施行、10カ月後の人工肛門閉鎖術の際に Schnitzler 転移を認め切除した。術後26カ月目に腹膜播種、小児頭大腫瘍による腎後性急性腎不全となり、経皮的腎瘻造設術を施行した。その後、腫瘍摘出術と CDDP の腹腔内投与を行ない、急性腎不全は治癒した。術後56カ月目に2回目の腎後性急性腎不全となったが、経皮的腎瘻造設術を行った。その後出現した後腹膜膿瘍の経皮的エコー下穿刺ドレナージ術、経静脈的な CDDP 治療により急性腎不全は治癒した。現在外来加療中である。S状結腸癌術後の腹膜播種に対して、手術、腹腔内及び経静脈的な CDDP の投与により、腎後性急性腎不全を治療した1例を経験した。

第47回新潟癌治療研究会演題

日時 平成5年7月3日(土)
午後1時30分より6時まで
会場 新潟東映ホテル
2F朱鷺の間

I. 一般演題

1) 肺転移をきたしながら長期に CR を維持している進行神経芽腫の1幼児例

大沢 義弘・岩渕 眞 (新潟大学小児外科)
浅見 恵子・笹崎 義博 (県立がんセンター)
内海 治郎 (新潟病院小児科)

神経芽腫は小児固形腫瘍の中で最も転移をきたし易い腫瘍であり、病期分類でもリンパ節、骨、眼窩、骨髄、肝、皮膚が転移好発部位として独自に標記されている。しかしながら他の腫瘍でよくみられる肺転移は稀であり、

さらに肺転移例の予後は極めて不良となっている。

我々は今回、発症時、肺転移を認めた多くの不良な予後因子（年齢：1歳以上，病期：IV-A，原発部位：副腎，組織型：円形細胞型，尿中 VMA：陰性，血清 LDH，NSE：高値，N-myc 癌遺伝子：増幅，DNA ploidy：Diploidy）を満たす症例に対し，強力な化学療法（厚生省班プロトコール）により，長期（3年10カ月）に CR 生存を得たので報告した。

本症例は多くの不良な予後因子を有しつつ，3年以上の長期生存を得ている稀な症例であるが，今後，いつまで加療すべきか問題が残っている。

2) 当科における CDDP 補助化学療法の検討

大平 敦郎・星名 秀行
鶴巻 浩・本岡 悟
森山万紀子・松田 尚子
大橋 靖

（新潟大学歯学部
口腔外科第二講座）

当科では昭和60年4月から化学療法として CDDP を臨床導入している。今回は一次治療後の CDDP 補助化学療法施行例29例について，その臨床効果を中心に報告する。対象症例の性別は男性26例，女性4例で，年齢は19歳から76歳，平均 57.9 歳。原発部位は舌7例，下顎歯肉6例，上顎洞5例，頬粘膜，口底，下顎骨各2例，上顎歯肉，硬口蓋，上顎骨，口峽咽頭，顎下腺各1例。組織型は扁平上皮癌24例，腺様嚢胞癌，腺癌，粘表皮腫，未分化癌，骨肉腫各1例。病期分類はI期2例，II期4例，III期6例，IV期14例である。投与方法は CDDP 単独20例，PEP（BLM を含む）との併用6例，5-FU との併用2例，ADR との併用1例で，CDDP を60～100 mg/body を点滴静注した。経過は腫瘍なく生存21例，原発巣死3例，顎部転移死2例，他病死3例で，遠隔転移は皆無であった。5か月から6年5か月の観察期間における累積生存率は3年・72.2%，5年・61.9%であった。

3) 当科における超高齢者口腔癌治療に対する臨床的検討

成田 保之・土川 幸三
加藤 譲治

（日本歯科大学新潟
歯学部口腔外科
第二講座）

我が国における高齢化に伴い，高齢者の口腔癌患者も増加しているといわれている。特に，80歳以上においては，余命との兼ね合いや，体力的な問題，家族環境の問

題から，積極的な治療を躊躇することが少なからずあることから，80歳以上を超高齢者とし，超高齢口腔癌患者について，治療上の問題点や予後について検討を加えて報告する。対象は1975年から1991年までの12年間に当科を受診した80歳以上の超高齢口腔癌患者一次症例10例とした。その結果，Performance status（以下 P.S とする）としては，3度が1例，1度が9例であった。既往歴，術前検査所見からは，全例に何らかの全身合併症を有していた。平均余命5年以上，P.S 0～2度で，重篤な全身合併症のない症例は4例で，すべて根治的外科切除を施行した。平均余命5年未満，重篤な全身合併症のある症例，あるいは本人・家族の同意が得られなかった症例の2例に対しては姑息的治療態度をとった。

4) 骨肉腫患者に対する Methotrexate 大量療法による NK 細胞活性の増強とリンパ球サブセットの変化

山村倉一郎・堀田 利雄
平田 泰治・守田 哲郎
小林 宏人
高橋 栄明・井上 善也
堀田 哲夫・大塚 寛
生越 章・今泉 聡

（県立がんセンター
新潟病院整形外科）

（新潟大学整形外科）

【対象】新潟大学および県立がんセンター新潟病院整形外科で加療された骨肉腫6例（年齢12から33才，男5，女1）12クールを対象とした。

【方法】MTX は体表面積あたり6から12gを5から6時間で点滴静注し，Leucovorin はMTX 投与開始後24時間から15mgを3から6時間毎に計17回投与した。NK細胞活性は⁵¹Cr遊離法，リンパ球サブセットはtwo color解析法によりMTX投与前日と投与後7日目に計測した。使用した蛍光標識モノクローナル抗体とその組合せは，(1) CD16×CD56 (2) CD16×CD57 (3) CD4×CD8 (4) CD8×CD11 (5) CD8×HLA-DR (6) CD3×TCR δ -1 の6種類とした。

【結果】NK細胞活性はMTX投与前22.7±8.7%と全体に低値を示した。投与後は43.9±16.2%と有意な上昇を認め（p<0.01），3回の計測で投与前の3倍以上に増強していた。リンパ球サブセットは，NK細胞のうち non T-NK細胞とされる CD16⁺CD56⁺細胞がMTX投与前後で軽度の増加傾向を示した。